

口頭発表「不登校児がモルモット飼育の機会を得て」

芳倉優富子* 三本隆行**

1 取り組みの概要

平成24年4月、小学3年生になって一週間後に登校しづりが出始め、教室に入れなくなり、保健室登校となった母子分離不安を持つ児童が、平成24年11月からモルモット飼育の機会を得た。

平成24年10月からは、家は出ることができないものの学校が近づいて来ると足が止まってしまい、学校に入ることができない日が多くなってきた。母親は、本児の様子から仕事の量を減らし母子登校を続けた。しかし、母子登校であっても立ち止まり、学校に入れなくなった本児に、モルモットの飼育を通して学校での居場所、心の安定の場所、自分の役割の確認をさせるよう試みた。登校できる日が徐々に増え、教室に入る日もでてきた。

2 本児について

本児：小学3年生 Sさん

(平成24年5月～25年3月)

家族構成：父・母・兄・姉・本児の5人家族
家族背景

姉が小学校入学時から母子分離不安のため2年生まで母子登校。2年生途中から少しずつ分離ができ、一人で学校生活が送れるようになる。その後、不登校になることもなく6年生3学期まで過ごす。

しかし、6年生3学期より休みがちになり卒業式も別に行う。中学校でも不登校となり、平成24年5月には家から全く出ようとしなくなった。本児が教室へ入ることを嫌がりだした時期と重なる。

3 本児の経過

【1学期】

本児小学3年生の平成24年4月末、担任の男の先生に注意されたことがきっかけとなり

「男の先生がこわい」と教室に行くことを拒み、休みがちになりながらも保健室登校のみ続ける。

毎週水曜日に心理学専攻の大学院生が保健室登校をサポートする。また、1年に3回大学心理学教授とのケース会議（母親、養護教諭、特別支援コーディネーター、香芝市スクールソーシャルワーカー、学級担任が出席）を行い本児の支援方法について話し合った。その話し合いから学校の入り口から入れない時には、お母さんに一緒にいてほしいとお願いするが、母親の仕事もあり本児を残し仕事に行かざるを得ない様子であった。また、母親が姉を中学に連れて行かなくてははいけない日ほど離れにくい様子が見られ、母親も本児と姉の間で焦っておられる様子であった。

一学期は、同じ学級の友だちが保健室に迎えに来てくれて、まれに教室で活動する時間もあったが、ほとんどの時間を保健室で過ごしていた。改善される様子もないまま、学校の入り口で黙ったまま立ち尽くし動こうとしない姿が続いた。

母親の手にすがって動こうとしない本時の様子から母子登校も視野に入れ、母親の就業時間を減らすようお願いした。保護者もこのままでは何も変わらないという危機感から、仕事の時間を徐々に減らし本児や姉との時間を持つようにされた。

【2学期】

10月の運動会を終えた頃から、家を出て登校しようとするが、学校を前にすると足が進まず、学校玄関や校門、隣接幼稚園の前で立ち止まったまま動かなくなってしまう事が多くなる。

「無理しなくていいよ」、「家に帰ってもいいよ」という教員の言葉かけにも、何も答えず下を向いたまま黙って立ち止まり、長い時には、朝から昼食時間まで立ち止まっていたこともあ

る。立ち止まっていた時のことを、元気な時に何気なく聞いてみると、「足が動かなくなる。なんでか分からんけど。足が勝手に止まる。学校には行きたいけど行けない。」と答えてくれたことがある。

この頃から学校を休む日が増え、立ち止まると必ず帰ってしまい、学校玄関までは来ることができた時でも、「今日は、帰ります。」と帰ってしまう日も増えてきた。

一学期に「こわい」と感じていた学級担任との関係も修復され保健室で学級担任と学習しながら楽しそうに話す時間も出てきたが、登校には繋がらなかった。このままでは徐々に不登校になる可能性も懸念され、本児が学校に来ようと思えるような事ができないかケース会議で話し合った。

そこで、以前モルモット飼育で自信を取り戻した事例を提案し、本児にとって学校に来る意味や必然性を与えてみようと考えた。

学校長の許可を受け、モルモット飼育が始まる。

4 モルモット飼育にあたって

本児へ、以下の条件を守る約束でモルモット飼育を提案すると「私がやりたい!!」と答える。

- ① ステップ教室（通級指導教室）で飼育する予定だが、担当教諭は出張も多く忙しいので手伝って欲しい。
- ② 生後40日のモルモットなので、毎日必ず何回かお世話をしないといけない。
- ③ 土日や長期休暇には家に連れて帰る。
- ④ 室のモルモットだから、月曜日には連れて来て欲しい。

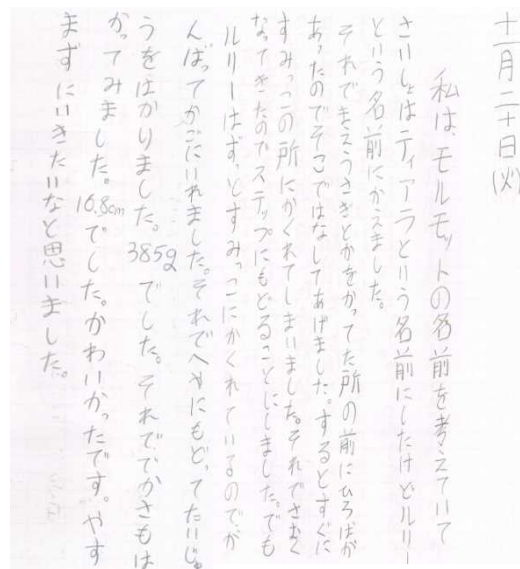
《平成24年11月19日（月）》

小学校にモルモットがやってくる。この日に、モルモットを届けてくれた獣医師から聞いたことをSさんがメモしている。

「両手で優しく持ってあげたら安心する。また、優しく静かにお話してもいい。無理に慣れさせようとしてずっと抱っこするのは、だめ。」

《平成24年11月20日（火）》

モルモットの名前を「ルリー」に決める。



体重 385 g 体長 16.8 cm 以後、定期的に体重と体長を測る

《平成24年12月17日（月）》

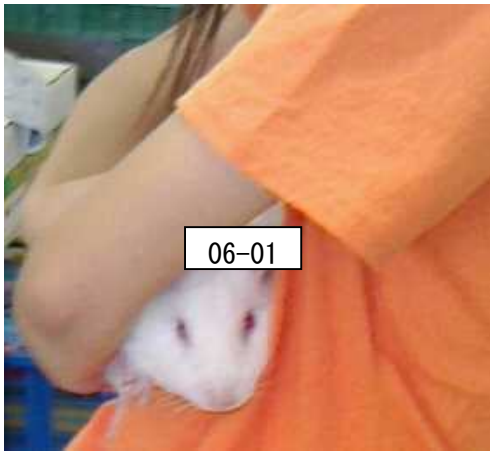
獣医師が学校に来てくれる日（ルリーの健康診断の日）

Sさんが〈獣医さんに聞くこと〉を準備した。

- ・ こういう持ち方でいいのですか？
- ・ 知らない子にさわられたり抱っこされたりするのは、だめですか？
- ・ 冬休みの時、爪が伸びたらどうすればいいですか？
- ・ 遊ばせる時はどこに放してあげたらいいですか？
- ・ 歯が伸びて口が閉まらなくなったらどうすればいいですか？
- ・ 冬休みにルリーが病気になったらどうすればいいですか？

この頃のSさんは、教室に他の児童が来てルリーを触ったり抱っこしたりすることや大きな声や物音をたてて遊ぶことに敏感で、「ルリーが嫌がっている」、「怖がっている」、「本当はいやなんや」と他の児童との接触をルリーが嫌がっていると saying it.

そこで、獣医さんの検診で本児に答えてもら羽ことにした。



<獣医師の回答>

- ・これくらい大きくなってきたら、優しくさわられたり抱っこされたりしても大丈夫.
- ・小さい時から学校にいるので、少しくらいやかましくても、夜には静かに過ごすことができているので大丈夫.
- ・固いものをかじって歯は削られるので口が閉まらなくなることはない.
- ・ルリーが病気になったら、獣医さんはすぐに駆けつける.

獣医さんの解答から思っているより、ルリーは強い。Sさんの不安を取り除くようなお話や言葉かけをしてもらい、弱そうに見えるモルモットのルリーが、案外強いことを教えてもらった。

5 本児の変化

ルリーが来てからは、学校前や幼稚園の角で止まっていたのが嘘のようにスムーズに登校できるようになった。

校長先生が「あの小さなネズミ一匹で、こんなに変わるのか?!」と驚き、「今まで学校では無表情だったが、笑顔で挨拶ができるようになった」と他の職員もうれしそうに話してくれた。それだけに、いつかルリーが死んだ時のショックが大きくなるのではないかと心配の声もあった。

登校しづらかった月曜日にも登校するようになる。どうしても登校できない月曜日には、ルリーを学校玄関に置き、「今日は、帰ります。」と言ってから帰るようになった。

平成 25 年 2 月 ルリーは弱々しかった姿か

ら成長し、頼もしく強くなってきた様を感じる。

飼育ケース内の木製の家の上に昇って、ケースのふたを押し上げたり、飼育ケースを掃除する時に小さなカゴに入れてあげていると、いつの間にかカゴを乗り越えて教室を歩いたり活動的になってきた。そんなルリーの姿を見て Sさんは、「外へ行きたいんや.」、「自由に動きたいのかな?」、「ルリーもいろんな事がしたいのかな?」、「遊びたいのかな?」等と言う事が多くなった。ルリーを飼育ケースから出して教室内で遊ばせたり、校内の旧ウサギ飼育舎（現在は飼育無し）へ連れて出たりすることが多くなった。この頃から下校時だけ、仲のいい友だちと一緒に帰る日も出てきた。



平成 25 年 3 月 次年度のことが話題になる時期である。Sさんは、登校はするものの教室には入ることができず保健室登校のみである。「来年度も保健室で過ごすのかな?」と関わってきた教員の多くは思っていた。

来年度に向けての部団（居住地域別）児童会で自分から進んで副部団長に立候補する。今年度ほとんど集団登校できていないSさんが立候補した事に教員一同驚き、どう思って立候補したのかを聞いてみると、「来年度は4年生やし、来るねん。」と言った。「みんなと同じように学校に来て、教室に行く。」と言う。

同時期、家庭で母親にルリーの事を相談していた。部団登校は集団登校になるので、ルリーを連れて登校できないし、ルリーを連れて下校できない。私が教室に行くと、ルリーのお世話をする人がいなくなる。だから、ルリーを獣医さんに返す方が良くはないか。という内容であった。担当からは、獣医さんから小学校に頂いたので学校で最後まで責任を持って飼育

する。ルリーは、通級指導教室で飼育している動物だから、Sさんが来られなくても通級指導教室の教員が毎日お世話をする。土日や長期休暇は、担当教員が家に連れて帰る。(他の先生も協力してくれる予定。)ルリーは通級指導教室に常時いるから、来られる時にお世話をしてくれると教員は助かる。そう話すと本時は、安心した様子で「家にルリーを連れて帰れない代わりに、子鳥を飼ってもらうことにした。」と嬉しそうに話した。母親からは「半年間ルリーを飼育して、子どもの気持ちが強くなったと思う。自分がやってあげないといけない、という思いを持ってくれた。動物を飼育する事で視野が広くなり、気持ちも安定してきたので飼育しやすい小鳥を家で飼うことになった。」と聞いた。

現在、通級指導教室では、Sさんもたまにお世話をしに来てくれるが、他の児童も多くやってくるようになってきている。継続して来る児童は、家庭の状況が不安定な児童、学習が上手いいかなくても教室で頑張っている児童、友だちと上手くやれない児童など少し荷物を抱えながら学校に来ている児童が多い。また、他校から通級してくる児童もルリーに会えるのを楽しみにしてくれている。



5 取り組みのまとめ

モルモットを飼育を始めてからの本児の変化は著しいものがあった。登校時の様子、表情、自分からの会話などいい方向に動いていった。

モルモット飼育の過程が本児にどのような働きをしたのかを考察してみる。

登校したくても足が止まる、登校できないという状況の本児は、自分でもわからない、どうしようもないという不安定な心理状態であった。その本児が生後40日という小さく弱弱しいモルモットを毎日飼育することで学校での自分の役割を確認することができた。また、飼育していくうちに何も言わずに無条件に受け入れてくれるモルモットに癒されていったのではないだろうか。

母との関係も、家庭でのモルモットのお世話やエサさがし(冬場でタンポポの葉やクローバーの葉などが少ない時期)に二人で出かけ、母と二人だけの特別な時間を過ごすことができ、母との心理的な繋がりも確認できたのではないか。モルモットを育てることで自身の母性が育ち、それと共に自尊感情も高まってきたと思われる。

小さなモルモットをたくましいモルモットに育てることを通して、登校する自信や集団に入っていく自信を失っている本児が、自分とモルモットを重ね、少しずつ大きく強くなっていくモルモットと同じように強くなっていったのではないだろうか。

(* 香芝市LD・ADHD等通級指導教室担当

** 帝塚山大学 奈良県獣医師会)